

5

イセリア 英雄戦記

the legend of the Aceru war

立ち読み版

編集 二次元ドリームマガジン編集部

挿絵 牡丹



第17話

絶望、そして覚醒

—— 本文担当…桜空

007

第18話

淫辱、そして逃走

—— 本文担当…青空白雲

065

第19話

闇の女騎士

—— 本文担当…狩野景

117

第20話

羞恥街の淫獄

—— 本文担当…天戸祐輝

185

Bonus

Track

241

登場人物紹介

Characters



セリーヌ＝アヴァリアレス

イセリア英雄国の騎士。外交も任せられ、王女からは絶大な信頼を与えている。お菓子作りが趣味という可愛らしい一面も。



フィオナ＝プリティッシュ

イセリア英雄国の王女。少し世間知らずなところがあるが、幼馴染みのセリーヌのことをとても大切に想っている。



リア

イセリア諜報部隊「クロウ」に所属する暗殺者。仲間の前では無邪気な姿を見せる。



アリオナ＝プリティッシュ

イセリア英雄国の現女王であり、フィオナの母親。メイズの瘴気にあてられていたため、病に臥せていた。



マイハ エルス＝M＝アムデルト

イセリアの第三騎士団団長を務める貴族令嬢。聖なる槍《セルフェザー》と特殊能力《マイハ反応》を使う。



ミーシャ＝フルナクト

「淫祇邪教」の調査でバーンドベルグに潜入していた猫耳の少女剣士。実はイセリア英雄国の大騎士団長である。



ドーラ＝ウォールドラゴン

イセリア英雄国の王城の食堂で料理長を務めている女性。食材探しの最中に森で倒れるセリーヌを救助するが……？



ギュスターヴ

バーンドベルグ帝国の皇帝。元は宰相だったが、前皇帝が没した際に事後を任せられ、皇帝の座に就いた。ギュスターヴというのは通り名で、本名はベリアルド＝オーギュスタン。



ウォルガード＝オーギュスタン

バーンドベルグ帝国の将軍。傲岸不遜な性格ながらも、戦いにおいては真摯で、正々堂々真正面から勝って蹂躞するのが好む。オーギュスタン家の嫡子。



メイベルローゼ＝オーギュスタン

バーンドベルグ帝国の皇帝ギュスターヴの末姫。あらゆる者の意識はそのままに、肉体を思うままに操れる「服従魔眼」を持つ。



サーシャ＝オーギュスタン

オーギュスタン家の長女。積極的に戦闘をするタイプではないが、様々な薬を使って敵を罠め捕ることを得意とする。



スレア＝エターム

メイズⅦ内でアリオナとエルスが出会った、最上級の「魔導具」を作る錬金術師。しかしその正体は……!?

イセリア英雄戦記とは?

二次元ドリームマガジン史上初の 超長期連載&読者参加型のリレー小説!

読者の参加によって物語が展開する。

A. ○○ルート
B. △△ルート

読者の投票で展開が変化!

A. ○○ルート

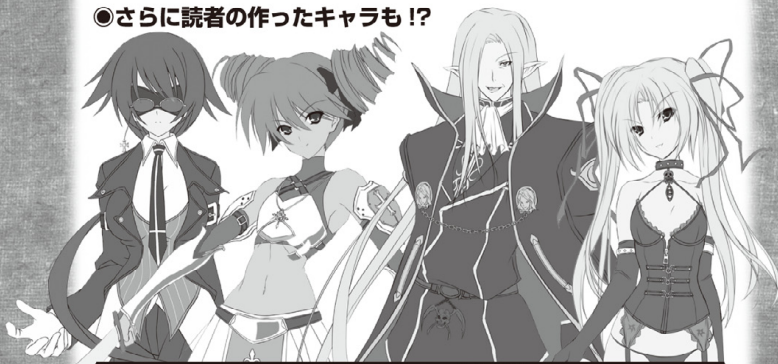
B. △△ルート

雑誌連載時には、本文中に選択肢が設けられています。アンケートハガキで「どちらが読みたいか」を投票していただき、より多くの支持を受けた選択肢に沿って物語が展開していきます。また、外伝小

説やオリジナルキャラクターを投稿することで、読者の皆さまで『イセリア英雄戦記』を作る楽しみを味わってください。

※選択肢は雑誌掲載版のみで、単行本では選択肢は削られています。ご了承ください。

●さらに読者の作ったキャラも!?



リレー小説形式での超長期連載

第17話
桜空先生

第18話
青空白雲先生

第19話
狩野景先生

第20話
天戸祐輝先生

今巻では第17話は桜空先生、第18話は青空白雲先生、第19話は狩野景先生、第20話は天戸祐輝先生と、1話ごとに本文を執筆する作家が変わります。また、連載回数が31回(2014年4月現在)を超える超長期連載によって、ヒロインたちがいつ墮ちるのが予想

できなくなっています。一話ごとに雰囲気が変わる文章や、いつ墮ちるかわからない緊迫感をお楽しみください。

※本作品の世界観および設定は、竹内けん先生に作っていただいたものをもとに、本編を執筆いただいた各作家さんと読者の皆様の意見で構成されております。

公式サイトでさらに楽しく!

読者による投稿小説や投稿キャラクターが公開されている公式サイトでさらに『イセリア英雄戦記』を楽しめます。登場キャラクターのスリーサイズや国の設定

などもまとめられており、現在行っている人気キャラクター投票などのWebコンテンツも今後、他のコンテンツを追加予定です。

『イセリア英雄戦記』公式サイト <http://ktcom.jp/icerya/>

「ほらほら、どう？ どんな気分？」

メイベルローゼの哄笑に、フィオナの声が重なる。

「いやああ、やめてええええええええ」

若洞に埋め込まれた触手が奥まで穿り返し、少女姫を悩ませる。

蜜汁がぶしゃあああああー、と噴き出した。太腿がびくくんと、震える。

「随分感じているじゃないの、このスケベ犬！ さあ、さつさとあの豚野郎の子供と、魔物の子供を産むことね」

勝ち誇った表情で、フィオナの豊かな胸をヒールでぐりぐりする。

「あ、つうう……」

フィオナの顔が歪んだ。

この痛みにはなかなか慣れない。だが、同時に快感も憶えていた。甘く切ない疼きが乳房の芯から湧き出てくる。ゆつたりと細波のように快感が広がり、乳首をも覆う。

（うそ……。痛いのに、感じてしまっているの？ わたくししたら、そんなにはしたくない女だったの？）

懸命に首を横に振る。自分の身体が意思を越えて変化していきそうで怖い。はあ……という乱れた息遣いに、果肉のような濃桃色唇が開き、真珠の如き歯が濡れて光る。

ギュスターヴに初めて陵辱されてから、数日が過ぎただけだが、散々犯されたためだろうか、身体が、性の快楽を求めて、いやらしくなってきた。イセリアの民が見たら、

どう思うだろうか。母や、幼馴染みの笑顔が浮かび、胸が痛んだ。

(このままじゃ……どうにもならなくなるわ。一生、帝国の奴隷に……)

イセリア公国も当然、この恐ろしい帝国のおもちゃにされてしまう。絶望に目の前が暗くなった。

「もつといい声で鳴きなさいっ」

メイベルローゼが叫んだ。鼻筋に薄い皺を寄せ、唇を吊り上げて。

「ん、ああ、ん、あううっ……いや、いやですっ。……う、あああん」

触手の先、亀頭が中を穿り返す。カリ首が擦れて、肉襷が細部までピリピリと熱く痺れていく。その痺悦は、腰の内奥にまで響き渡り、下半身が溶けていきそうだった。抑えようとしても、浅ましい声が漏れてしまう。

萎えかけた心の中、自分の声が聞こえてきた。

(このままでいいの？ フィオナ！ イセリア公国の姫として、こんなことで負けてもいいの？ 何としてでも、脱出するのよ！)

はっとした。目を大きく見開いて……。

「ふふん。どうしたの？ その顔は。もう降参かしら？ 不様な顔ねえ」

唇を歪め、お腹を撫でてくる。

「孕んだかしら？ 皇帝の子供はまだ生まれていないけど、魔物の卵はもうできているわよねえ？ ふふ。イセリアじゅうに伝えてやるわ。お姫様が、魔物の卵を産んだことをね！」

「ほほほほ。いいザマねっ」

触手を抜き去り、侍女が笑うと、フィオナは起き上がり、声をあげた。

「メイベルローゼ姫、話があるのっ。お願い、聞いて。わたくしをここから出して。お願い。一緒に戦いましょう」

「は？ 何をいきなり言い出すの？ 馬鹿なことを言わないでよ」

帝国の末姫が鼻を鳴らす。腰に手を当てて、見下した表情で。冷たい眼差しにも怯まず、フィオナが声を重ねる。

「あなただって、本当は、皇帝が憎いんじゃないですか？ 本当は、愛されたいのに、愛されないから……。だから、わたくしに八つ当たりでこんなことを。違いますか？」

「馬鹿なこと、言わないでよ！」

「あなたは寂しいんでしょう？ 父親に認めてもらえなくて、苦しいんでしょう？」

自分は、優しく気高い母親もいるし、セリーヌもいる。慕ってくれている部下はたくさんいる。わたくしは恵まれていたのだと、しみじみ感じ、メイベルローゼの孤独に想いを寄せる。メイベルローゼの心の隙を突いて、脱出を試みようとしていることに、後ろめたさを憶えながら……。

（わたくしって、卑怯かしら……）

今や、帝国の末姫への怒りがありつつも、同情する想いもある。

メイベルローゼは悩んでいるようだ。言葉を失い、揺れる瞳で、フィオナを見詰めてい

る。唇をきゅ、と囁んだ。

(皇帝と戦うなんて……)

と、メイベルローゼは考える。

もし、失敗したら、どんな目に遭うかもわからない。あの好色で、残忍な男ならば、自分の娘すら毒牙にかけないとも限らない。ふと想像してしまい、おぞまじさに鳥肌が立つ。「冗談じゃないわ！ あんたと一緒に、バーンドベルグと戦うって？ 無謀にもほどがあるわよ」

侍女は呆れた様子。

「あんたの国はもうお終いよ。帝国はクレオラと同盟を結んでいる。もう滅亡する運命なの」

「それでも、戻らなければいけないのですっ」

フィオナは懸命に訴えかける。わたくしは、絶対に国に戻らなければならないのだと。民を守るのだと……。

陵辱されてさえ、気高さを保つ姫に、メイベルローゼも驚き、呆れ、反発する思いもあるが、感心してしまっていた。

(この女……。あの豚にも陵辱されて、私にも辱められているのに、まだ気高さを失わないなんて。信じられない……)

自分の汚らわしさを感じ、唇を噛む。

「お願い。わたくしの脱出を助けて」

「こんな女の言うこと、聞かないほうがいいですよ」

耳打ちをする侍女に、フィオナが叫んだ。

「あなたにも申し訳なかつたと思つています。ご家族を守つてあげられなくて……。だから、罪滅ぼしに、わたくしを戦わせて」

侍女が怯んだ。少女姫の涙に、顔が歪む。

メイベルローゼも次第に心を動かされる。

（せっかく、イセリアの姫を献上したのに、あの男の態度は何なの……。少しくらい、褒美があつてもいいだろうに。あいつに嫌がらせのひとつもしてやりたくなつたわ）

どうせ、解放しても、イセリアは挟み撃ちにされている。帝国が揺らぐことはあるまい。

「わかつたわ。でも、条件があるわ」

怯えるフィオナ。しかし、すぐに瞳を強く輝かせ、頷いた。

「ふふん。メイベルローゼもよく考えてくれたじゃないか。またあの女を公開調教しようとは。がははははは」

皇帝の高笑いが響く中、フィオナは肩を縮めている。

翌日の夜。ひとり、あてがわれた部屋で夕食を済ませたフィオナは、大広間に連れてこ

られた。

少女姫は、公国で着ていたものと同じデザインのドレスを身に着けていた。ユズリハを模した装飾が美しい。

メイベルローゼは、ギユスターヴの横で腕を組み、にやにや笑っている。

大広間。兵士たちが百人はいる。皆、戦から帰ったばかりなのか、鎧姿である。むさくするしい男たちのおいに、フィオナは頭がくらくらしてくる。

(何てことなの……。またこんな目に遭うなんて)

兵士たちのいやらしい目つきに、思わず、顔を伏せる。

「いい女だな。見る、おっぱいがあんなにデカいぞ」

「ちんぽを挟んで欲しいな。さぞかし、気持ちがいいぞ」

「おお、勃起してきちまったよ」

下品な笑い声に、背筋が震える。ギユ、と手を握り締めた。胸の奥で、鼓動が速くなってくる。

皇帝がにやにやする。

(いったい、これから何をされるの……?)

フィオナはギユスターヴのいやらしい笑顔に、肩を縮めた。手をぎゅ、と握り締める。

「今日は、この者どもの労をねぎらってやれ。戦いで疲れているからな。戦で女日照りに

もなっている。あくまで、お前はワシのものだが、まあ、たまにはこういう趣向もいいだろう」

その言葉に、英雄国の姫は唇を震わせた。

(そんなっ……。こんなに多くの男の人に？ うそでしよう?)

両横に男たちが来て、何列かに並んだ兵士の前に連れていかれる。抵抗する気はない。ここで我慢すれば、国に帰れるのだから。果たして、イセリアが帝国に勝てるかどうか、わからないが、やってみるしかない。

(絶対に、セリーヌに会って相談して、この戦争に勝ってみせる)

「さあ、さっさとしゃぶりな」

「はい……」と目に涙が光る。

兵士らは皆鎧姿。腰には剣を差している。フィオナの前の壮年の色の黒い男がにやにやして、カチャカチャという音を鳴らして、鎧の前を開いた。

「舐めさせていただきます、だろう？ フィオナ姫」

「はい……。舐めさせていただきます」

「イセリアへの侵略、ご苦労さまです、は？」

そこまで言わせるのか……。姫である自分をいたぶって喜んでいるのだ。

「イ、イセリアへの侵略、ご苦労さまで……。ございます」

満足げに男が笑った。

跪いて、兵士の剥き出しになった勃起を舐める。鼻につん、と汗臭さが感じられた。かなり長い間、洗っていないようだ。きつい臭気に、思わず眉間に皺が寄る。それでも、耐えねばならない。

「おお、気持ちいいぜえええ」

他の兵士が口々に言う。

「うらやましいな。早く出せよ」

「俺も、しゃぶってもらいたいぜ。全然出していなかったからな」

下品な歓声があがる。男たちの慰みものにされる痛みが胸を襲った。悲しみに、柳眉がカーブを大きく描く。

「待っているって。くはあ、イセリアの姫様もこのザマか」

英雄国の美少女姫がペニスを含む。根元までだ。苦い、そしてしょっぱい味がして、舌の味蕾を刺激した。

じゅぶ、ちゅぶ、ちゅぽ、ちゅぽ、ちゅぶん。

じゅわ……と我慢汁が溢れている。鼻奥にイカ臭が抜けていく。

男がカクカク腰を振る。

「早く……、出してください」

涙を湛えた少女姫の哀願に、男が頬を緩ませる。

「はぐう……」

と、苦しそうなフィオナ。咽の奥まで亀頭が侵入してくる。亀頭がぶよぶよして、この柔らかさに慣れることがない。ただ、竿は硬く、浮き出た血管に舌が這うと、妙に舌がぴりぴりする。どこか心地よさを伴う感覚に、フィオナの眉がたわみ、優しい鼻翼が膨らみ、柔らかい鼻息が漏れる。

「うへえ、たまらねえぜ。おい、おっぱいも出しな」

「はい……」

カップを外すと、ぼろん……と双子の肉球が溢れ出る。素晴らしい巨乳。おそらく、男の手でも覆いきることができない。丸々とした白肉は、豊かなラインを描きつつ、薄く静脈を浮かせている。頂点に位置する乳首は薄赤い。

「たまらねえな。おい、ちんぽを挟んでくれや」

「はい、わかりました」

膝をついた兵士の肉幹を爆乳でサンドイッチにする。幹部分は埋まってしまい、先っぽだけが辛うじて顔を出す。薄赤の亀頭に我慢汁が滲む。

（ああ、すごいにおい……。嫌なおいなのに、頭がくらくらしてきます）

激しく扱き立てるフィオナ。左右いっぺんに上下させたり、互い違いにずり上げ、ずり下げる。我慢汁と唾液が、亀頭と乳肌境界面に泡立ち、小さな雫を浮かせる。ギュスターヴの調教によって、身体に憶えさせられた愛撫方法だ。

「くああああ、気持ちいいぞ。おい、先っぽを啜えてくれ」

屈辱に眉をひそめながら、亀頭を含む。

(ああ、この人は少し苦い……。ん、咽が熱い)

唇を窄めて、ちゅう、と吸いながら、肉房を上下させる。何回も、何十回も……。いつしか、透き通るような白い乳房が、桜色に息づいていく。ぴよこん、と勃起した乳首が愛らしい。

「おお、出るっ。臭い精子出してやるぞおおおお」

「出してくださいっ。いっぱいっ」

亀頭から口を離し、叫ぶ。さらに胸房を上下させた。

どびゅ、びゅ、びゅるるるるるるっ。

亀頭が膨れ上がった感触が気持ち悪かった。

一気に咽奥目がけてしぶいた。

(うう……。気持ち悪い。なぜ、こんなに、粘っこいの……?)

ギユスターヴの精液も何度か飲んだが、慣れることはない。咽に絡みつき、噎せそうになる。それでも、何とか飲み干した。

「まだまだ兵士は残っているぞ。次はまんこで奉仕してもらおうか」

「うう、そんな……」

「嫌だっ言うのか?」

男の鋭い目つきに、慌てて首を横に振る。



じゅぶ、ちゅぶ、ちゅぶん。べろ、べろん。ちゅ、じゅ、ちゅじゅ。

柔唇スライドになおのこと、牡幹に唾液泡が立つ。薄暗がりの廊下で、壁に取りつけられた蠟燭の火に、唾玉が黄金に輝く。ねっとり唾液に濡れながら、欲望幹に太く血管が浮き上がる。

やがて、ドラグノフも高まってきたようだ。呼吸が荒くなってきた。歪む口から涎が垂れてくる。

「くおとおおっ。出るっ、出るぞ」

「ああ、かけるなっ。だめっ」

闇帝国の末姫が口を離し、叫んだ。

「おらっ、しゃぶらないかっ。勝手に口を離すんじゃない！」

ぐぼ、と小さな朱唇に太幹が突っ込まれる。ふんふん、と苦しげに鼻呼吸するメイベルローゼ。頬が赤らみ、眉間に深い皺が寄る。うぐっ……と帝国の末姫は頬を震わせた。

「イクぞ！ たっぷり濃いやつを出してやる！」

ドラグノフの頬が震えた。

どびゅ、どびゅるるる、びゅるるるるるるっ。

そして、ペニスが抜き取られた。ぶるん！ と牡幹がしなった。鈴口から、白露がいくつか飛び、高慢な魔眼姫の額に、鼻筋に落下、着地した。

「いい顔じゃないか、メイベルローゼ」

亀頭を魔眼姫の頬や鼻筋になすりつけてくる。牡の欲望汁が、糸を引き、生臭い精臭を漂わせて、麗しい顔をパツクする。

「今度は貴様だ、フィオナッ」

「はい、ただいま……」

「パイズリでもしてもらおうか。そのスケベおっぱいを活かすんだ」

膝立ちになり、脚を大股に開いてやや腰を低く落とした將軍の股間に豊満乳を添える。禍々しい黒幹をサンドイッチにして、唾を垂らす。ギユスターヴの騾あればこそその心遣いだ。

手から溢れんばかりの双乳膨らみ、その合間から飛び出した灰桃色の亀頭に口づけし、舌を這わせた。円を描くように、そして、直線状に舌を運動させ、亀頭を喜悅させる。

ぴちゅ、ぴちゅ、ぴちゅん。れろ、れろろ、べろろん。ぴちゅ、じゅちゅう。

「ふふん。上手いじゃないか」

將軍の手が、フィオナの髪を撫でた。なぜか、優しい撫で方に、少女姫の心が温かくなっていく。

（何て、はしたないの、わたくしったら……）

恥じ入りながら、亀頭をすっぽり口に含む。途端に、苦味が舌に染みた。眉間に皺を刻みながら、左右双方の巨房を上下させる。一回、二回、三回とテンポよく。首振りも徐々に加速。亀頭のぶよぶよした感覚と、カリ首の硬さに舌がくすぐったくもあり、熱くもあ

った。

細く、優しい丸みを帯びた肩を、金色の髪が揺れる。

「なかなか上手いじゃないか。男を悦ばせるポイントをわかっているんだな？」

「そうですか？ 嬉しいです」

美少女姫は思わず喜びに目を細め、亀頭をペロペロ舐めた。そしてまた啜え込み、首を振る。

じゅぽ、じゅぽ、じゅぽぶぶ、じゅぽ。ずぶ、ずぶん。

顔を傾け、口腔粘膜で亀頭扱きする。そして、また顔の角度を戻し、吸い上げていく。

「もういい。ハメてやるっ」

四つん這いにさせられた。獣の体位に興奮が増してしまふ。

ずぶっ、と太く硬い牡幹が若膺に埋まってくる。カリ首が蜜肉を擦り上げて、奥へと侵入してきた。鋭敏な性感刺激が、少女洞全体を包み込む。かあっと腰の奥まで愉悦が波紋となつて広がっていく。フィオナは思わず、お尻を揺らしてしまふ。

「おお、実に具合のいいおまんこだ。陛下が喜ぶのも納得か。たっぷり味わわせてもらおう」

頼りなげな腰を掴み、激しく腰を打ちつけてくる。

「あ、ん、ん、ああ、あ、ん、はうっ……。ああ、いや、感じちゃう」

「お前も来い。まだまだ可愛がつてやる」

メイベルローゼに怒鳴る。悔しそうな顔をしたが、すぐにふらふらとこちらにやつてくる。

「フィオナと並んでケツを向ける」

帝国の姫が唇を噛み締めつつ、四つん這いになり、小ぶりの美尻を向ける。

「さあ、挿れてやるぞ」

「うう……。初めてなのに、こんな奴に……」

頬を怒りと屈辱に赤くさせ、震わせる。

「すぐに俺のちんぽに夢中になるさ」

しっとりした尻肌を撫でて、醜い笑いに犬歯を剥き出しにする。

膨れ上がった龟头が、魔眼姫の処女腔に向かう。

「おらああっ」

と、太幹を肉腔に埋めてくる。一気に奥まで貫いてきた。

「きゃああああああああああっ」

と絶叫をあげるメイベルローゼ。気を失ってしまいそうなほどの激痛が腔から脳にまで駆け抜けた。

「くはははは。これがメイベルローゼの処女まんこか。うーむ、美味しい。美味しいぞっ」

と、高笑いを響かせて、容赦なく太く長い欲望幹を抽送してくる。ペニスが行き来する

度に、異物感が生まれ、処女膜には灼熱痛が弾ける。

「くふううう……。もつと、ゆつくりい……。し、しな、さい」

「ふん。そんなんじゃ、感じないわ。ほら、もつとまんこを締めて男を悦ばせてみろっ」

お尻をぶたれ、「あうっ」と涙の雫を輝かせるメイベルローゼ。

右手でフィオナのアヌスを弄くり、穿り倒す。指二本を抱えて、浅ましく口を開けた肉肛は、肉を盛り上げ、薄赤くなっていた。

「あう、ん、んあああ……。ああ、ドラグノフ様あああ」

フィオナが甘い啜り泣きに、豊かなお尻を揺らす。それに釣られるように、次第にメイベルローゼの声も苦痛だけではなく、肉悦のトーンも含んできた。

「あ、ああ、ん、うう……。うそ、感じるはずなのにっ。——ん、あああああ」

高く張り出したカリ首が、魔眼姫の女肉を擦り上げる。膣の天井を亀頭が擦り、かつかと快感の火種が生まれて弾けた。子宮底を打たれて、ズーンと重く熱い愉悦衝撃が突き抜けていく。

瞳を潤ませ、は、は、は、と息を弾ませる。鼻筋脇から頬にかけて汗の細かい粒を浮き立たせる。ぎこちない腰遣いに、小ぶりの胸乳の膨らみが、前後スイングする。

「ぐはははははっ。感じてきたか、メイベルローゼッ」

「あう、ん、ん、はう、おちんぽお……最高おとおお。あう、身体があ、溶けちゃうふうううう」

あられもない悦楽の叫びをあげ、メイベルローゼは涎を垂らして、肘を崩す。

すぐさま、將軍は移動し、フィオナの菊門に突っ込んだ。

「きやふううううう。う、う、いた、痛い、ん、ふああああ」

激しい突き込みに、床にくっついた乳峰を拉げさせて、痛みに咽び、快楽に鳴き、フィオナは頬を真っ赤に染める。

「うおおおおおつ。すごい締めつけだなつ。食らいついてくるじゃないか」

「くふうう……。あう、ん、んあ、ああ、お尻、お尻がああ……。焼けちやうつ」

「まだまだだつ」

菊肛に埋め込み、ズボズボと犯す。激しい出し入れに、美少女姫も美顔をくしゃくしゃに歪めていく。

「あう、ん、ひやううううつ……。イク、ん、ああ、イッてしまいますつ。あう、気持ちいいですううううう」

「ぐおおお、いくぞ」

脳天にまで熱い性感衝撃が貫く。骨が、筋肉までもがぶちぶち音を立てて、快楽熱に蕩けていくようだった。

「またお前だ、メイベルローゼッ。おらああつ」

「あう、ん、あああつ。だめ、ああ、だめええええええ」

若洞をこれでもか、と掘りかえされ、高慢な末姫は喘ぐ。眉根を寄せ、睫を涙に濡らし、



唇を波打たせて。

「ああ、おかしくなるっ。いや、いやああああ」

「ははは。十分おかしくなるがいいっ。遠慮はいらんぞっ」

そして、また抜き去り、フィオナ姫の肉腔に移る。メイベルローゼの悦汁に鈍く光る太茎が、ずぼっ、と美少女姫に埋め込まれた。

「はうううっ。あん、ん、ああ、またイキそうです。あん、素敵っ。ドラグノフ様のおちんぼ、素敵いいいい」

フィオナを攻めながら、メイベルローゼの未熟腔に指を二本突っ込んだ。

「ああ、ん、ああああっ。感じるっ。ああああっ」

末姫が涎を垂らして叫ぶ。

「そろそろイクぞっ。中にこっそり出してやるっ」

メイベルローゼの牝洞に太い硬幹を突き入れ、子宮口をノックする。フィオナの菊口に指を二本挿入して直腸管を弄りながら。

「ひいひい。イク、ん、あああっ。ああ、ん、ん。イクイクうううううう」

「わたくしも、あん、フィオナもイキますっ。はうう、イクイク、ん、イクうううううう」

不様なアクメ顔を見せて、全身を痙攣させるメイベルローゼ。

「ぬおおお、出るっ」

どぴゅ、どぴゅるるるる、じゅぴゅるるるるるるっ。

子宮口に熱い精液爆発を受け、一瞬意識が飛んだ。

と、その時だった。

廊下の奥から駆ける足音が。はっとして、ドラグノフが立ち上がる。

「ひゃああ、何なんにゃ、お前？ 素っ裸で？」

髪から可愛い猫耳が飛び出し、尻尾までついている美少女。ミーニャンだった。

「あ、あなたは……」

フィオナが目を見開く。ミーニャンは、素っ裸のイセリア公国の姫を見て、目を大きく見開いた。そして、きつとドラグノフを睨みつける。

「お前、まさか……。姫に、いやらしいことをつ？」

「ふふん。だとしたら何だ？ え？ どこから入ってきたのか知らんが、子供の来るところじゃないぞ？」

将軍は素早く鎧を身に着け、ハルバートを構えた。相手が愛らしい子供でも、油断はしていないようだ。

「許さんにゃ。お前だけはっ……」

ミーニャンが腕にくっついていたぬいぐるみを操る。はっと思を飲む間に巨大な出刃包丁に変化する。

鎧の下からまさぐり出す、赤銅色に充血した剛直。恥垢などなく、青筋立てて天を突くようにいきり勃った、長さも太さもカリの張り出し具合も並外れた怒張肉に、疼く子宮と連動して心臓が高鳴りはしゃぐ。

(こんなおぞましい、ものを、私の、膣内につ!! 敵の皇子の、ペニスなんかッ。挿入れられるなんて、嫌だッ!!)

しかし目が離せない。瞬きを忘れる。込み上げる生唾を、音を立ててグビリと飲み下す。M字開脚の股座で挿入を懇願するかのように濃厚蜜を零し、女陰花卉がちゅ、ぴちゅ、と淫靡な音色を奏でて微震する。

もはや濡れ蕩けてその下を完全に透けさせている純白シヨーツを邪魔とばかりに押し寄せると、ウォルガードはふんぞり返った肉槍の切っ先を、薄桃色に色づいて開いた割れ目に遠慮なく突き立てた。

「——ッ!! お、あああッ」

壮絶な衝撃に一瞬意識が弾け飛んだ。息が詰まり、心臓の鼓動が急激に加速して狂ったように血液を押し流す。

問答無用の甘美が、薬物によつて鋭敏にされた粘膜から怒涛の勢いで全身に広がった。

「くうっ、ふあっ、ダメッ!! お、おおっ、や、あ、へあああ——っ!」

官能の刺激に備えて気を引き締めたはずなのに、極太が濡れ陰部に触れた瞬間の激感は、予想を遥かに超えていた。

ただでさえ鋭敏な粘膜を濡らす秘処がサーシャの薬液によって際限なく感度を高められ、快感を暴走させている。

無防備極まりなく大股開きさせられた両脚を閉ざすこともできず、為す術もなしに膣穴を拳骨のような亀頭がこじ開けて埋まりくる。

「んぐう、ぎひ、いいいあうッ、大き……い、だ、あめっ、へあああ、裂け……ちやうううっ!!」

感度が今現在も高まりゆく肉体。その鋭敏極まりない狭穴を無理矢理広げられる切迫に呻くが、夥しい愛液の潤滑に極太の切っ先は、ずッぽん、とあっけなく嵌まり込んだ。

(こんなのっ！ こん……なのお、痛い、のにいいっ!! あっ、ああっ、ん……くふああっ)

初めて異物を受け入れたデリケートな肉壁を強引にこじ開けられるだけでも辛い。なのに肉体を蝕む薬のせいで、硬く膨張した竿肌が穴壁の粘膜を擦る痛みを、悦楽として受け止めてしまう。

(ふえっ、はああ、挿入っ、て、きひやっはああっ。ああっ、やだ、だめえ、あああ、そんな、ダメダメダメダメッ)

まだ先っぽが埋まっただけなのに、早くもイキそうになっている。

その最中、亀頭の切っ先が純潔の証である薄膜に突き当たった。これまで幾度となく陵辱を受け危機に晒されながら、運よく難を逃れてきた箇所。

方がない。今だつて密着した肉壁を怒張の脈打ちに揺らされているだけで、悩ましい喘ぎをあげてしまいそうになるほど感じている。

「仕方がないわよ、この女騎士つたら処女の時から男にお尻可愛がられてイキまくつていた淫乱なんだからあ」

サーシャがセリーヌの上体を起こしながら寝台の上に乗ってきて、背後から抱きかかえてきた。

「あ、あれ……は……。んくう」

「反論しようとして何も言い返せない。挿入されているだけでも乱れ崩れてしまいそうなのに、大量に薬液を飲まされパンパンに膨らんだ腹が上半身を起こされたことで圧迫され、苦しさに苛まれる。」

「うふふ、こんなに乳首コチコチにさせちゃつて。ウォルガードのおちんちはそんなに美味し〜い？」

兵士たちに弄られて留め具が緩んだ胸当てがズレ落ちるように外れた。

ぶるんとたわみ弾む乳房を後ろから捏ね弄りながら、紫髪の敵皇女が指先で押し潰すように充血粒を転がしてくる。

「ふえはあああつ、だ、だめつ、いじる……なあつ、そ、こおつ!! んふうううッ! ひうつ、ひいうううン!!」

途端に脳裏に火花が弾けて、媚びるように鼻にかかった嬌声が口から溢れ出た。もし身

ズパッ、ズパンッ!

「ひううっ! ふぁええっ!!」

滴り続ける愛液が甘美の増幅に拍車をかける。一撃ごとに子宮が拉げるほど強く弾かれて、意識が寸断するほどに狂おしい衝撃が脳を襲う。

「あはあ、すっごくエッチな顔になってるう。初めてなのにおちんちんに突かれるのが気持ちよくてたまらないのね♪ 淫☆乱」

豊かな房肉に指を深くめり込ませ、抉るように捏ね回しながらサーシャが表情を確かめ嘲る。

「——ち、ちが……あ、ああ……」

慌てて否定しようとした瞬間、妖艶な皇女は熱い吐息を吹きかけつつ耳を甘噛みしてきた。

しつとりと潤んだ彼女の唇が柔らかくへばりつくすぐつたさとともに、歯の硬さが刺すような痛みとともに耳朶へ食い込んでくる。

「ひうッ!! ~~~~~ッ」

乳首や陰核ではない。しかし十分に鋭敏でありながら無防備を晒す箇所へ思いもかけない奇襲を受け、快楽の肉壺がわななき立った。

チクリとした痛みが甘美の限界に達した肉体を起爆させ絶頂へと導き誘う。

「はうっ、あつはあああ——ッ!」

ぶじゃっ、びゅじゅじゅ〜〜ッ!!

限界の寸前でどうにか耐えきつていた理性が一気に決壊した。

意識を弾き上げられる甘美な噴火に、セリーヌは濃密な潮汁をぶちまけて絶頂へと達した。

(ああ、イツ、イツてしまった……)

屈辱に打ちひしがれた心が朦朧と浮遊し、快楽に満たされる。

「くう、お、おおああ、ン——ッ、ふえあああ、だ、だめッ、だ、ああ、ッ、も、もおおつ、もう、やつ、ああっ」

しかし絶頂の余韻に浸るのを許さぬとばかりに、ウォルガードのストロークはいささかも勢いを緩めない。

「イツたか、セリーヌ。いい締めまり具合だっ！」

それどころか絶頂に収縮した膣の締めつけに喜び、彼女の腰をしつかりと掴んでますます抽送を加速させてくる。

「ひううっ! も、やめ、ひやめへっ、ふえああああ、イツてる!! 私、もう、イツてるかりヤッ! ん、んんう、お……へあああああ——ッ!!」

絶頂が収まりきらない状態からさらに追加の快楽を押しつけられ、二重の絶頂が荒れ狂った。

「まあ、またイツたわよこの女騎士。いくら薬で感度が高まっているからって、早すぎる

わ〜」

「くひ……ああ、だ、つて、んおあッ」

恥ずかしさと情けなさで胸がいつぱいになるがどうしようもない。

しかも嘲りながらサーシャは充血に激しく疼く乳首を指先で抓ってくる。

「さあ、もう一度はしたなくイキなさい！」

「ひぎっ！ お、おとお、ああっ!!」

ぶじゅっ、ぶちゅちゅっ！

熱湯が血管を駆け巡るような刺激に絶頂が爆ぜる。

「イキっ放しの締めまりっ放しだな。この穴はっ!!」

怒張にしがみつくように収縮する膣壁をこそげて、ウォルガードの突き込みが乱暴に子

宮を責めた。

「あ、ああっ、だめっ、そお、そんなひゃっ、おきゅううっ、きひいつ!!」

またイッた。脳裏に発光が瞬き続けて、思考が寸刻みにリセットされ簡単な受け答えすらできそうにない。

コンコンと膣奥を突かれる度にどうしようもない官能が全細胞に染み込んで、さらなる絶頂をうながしてくる。

「ひうっ！ ああっ、い、イクッ!! ンッ、おとおおお……ッ！」

びじゅっ、ぷっしゅっ!!

身体を動かさないことがかえって刺激への集中を高めることになって、硬く極太な肉棒が膣壁を荒々しくこそげて擦れあう感触を余すことなく味わう。

ずぶつ！ ずぼぼ、パンツパンツパンツ！！ ズンツ！ ズップズップツ！！

「あつ、ン、ンンンンツツだめえつ、ふあああああ~~~~ツッ！」

ぶつしゃ~~~~つ、びゅじゅじゅつ！！

絶頂に次ぐ絶頂で、快楽の濃度が際限なく高まりイケばイクほどさらにイクやすくなる。まるで失禁のように、絶頂潮を吹き出しつ放しにしながら、それでも身体は痙攣ひとつせず、膣穴だけを収縮しつ放しにさせて際限なく絶頂を重複させ続ける。

「ほら見て見て、この子ったらイクまくりすぎて顔がへらへらのぐちゃぐちゃ。もう頭の中真っ白になつてるんじゃない？ そろそろ、だわね……♪」

（ふえ……ああ、もう、やめ……ふえ、——んくつ、ひつ！ おほあツ！！）

サーシャの言う通りだった。官能に支配された頭は何ひとつまともに考えることができない。顔は涎と涙を垂れ流し白目を剥いてアへ崩れた表情となつているのに、自由を奪われた身体は人形のように身動きひとつせず汗も掻いていない。サーシャに抱き支えられたままウォルガードの怒張を突き込まれ、倒錯的な違和感を醸し出す。

（あひい、気持ちひいいい、膣、気持ちいいのお。太いの入ったり出たりい、ああああつ、奥きたあ、深いの来ッ、へあああああ~~~~♪）

一度甘美を認めると、一気に心が快感の虜となつた。

膣と子宮は陰茎の突き込みに甘美の脈打ちを激しくさせ、奥底から熱いヌメリ汁を吹きかけながら、蠢く鬩を怒張に絡みつかせてくる。

「心地よいぞ、セリーヌアヴァリアレス！ 今後は貴様を俺様専用の性具として好きな時に使つてやる。ありがたく思えッ!!」

「はひ、ありがちよごじやいましゅう。うおりゆがーろしゃまのおちんぼで、膣内あズポズポしへくらひやい〜」

子宮をグツと圧迫されながら告げられ、息が詰まるほどの疼きに塗れて服従の言葉を返すと、被虐的な官能が背筋を駆け昇つてますます快楽の深淵へと意識が引きずり込まれる。このままセリーヌという個性を完全に崩壊させて一個の淫らな肉便器へと作り替えるべく、勃起肉がさらに太さを増して打ち震え、拡張された狭腔穴を揺るがしながらさらに押し広げた。

「はひああつ！ んおおおああつ、ふ、太ひいいつ!! おつ、おう、はあつ！」

M字開帳で突き込まれるままにされたイセリアの女騎士がさらなる絶頂の込み上げに悩乱する。その灼熱と化した子宮壺へ、

どびゆるるるっ!! ぶびゅびゅっ! どっびゅっ、どびゅびゅぶぶばあッ!!

濃厚な白濁が弾丸のような勢いで叩きつけられた。

大量の孕ませ汁が子宮口を無理矢理にこじ開けて、蕩けた坩堝の中へと雪崩れ込む。

「んうぐうううっ! ぎっひいあああああッ!! イッ、イイイイクウウウッは

あああああ——ッ！」

獣のような野太い嬌声を張り上げて、セリーヌは意識ごとにはね上げる壮絶な絶頂に達した。

限界を超えた官能の暴乱に身動きを封じられていた身体が激しく痙攣し、たわわな乳房を奔放に弾ませる。その途端に、漆黒の瘴気が官能の肢体を取り巻くように滲み出てきた。

「始まったわよ……」

これまでと違う真剣な口調で呟き、サーシャがセリーヌから離れ距離を取った。ウォルガードも危険な予感に後ずさると、ペニスの抜けたヴァギナから、子宮壺に収まりきらなかった夥しい精液が脱力の栗花臭を振りまいて、びじゅぶじゅと溢れかえる。

「グ、オ、オ、ア、アアアアアッ!!」

濃度を増す瘴気を全身に纏い、セリーヌの肉体が異様な気配を放ち始める。絶頂に乱れた青い髪が、みるみるうちに深淵の闇色へと染まりゆく。

寝台の上にゆっくりと立ち上がるその身から、ビリビリと大気を震わせて禍々しく圧倒的な波動が溢れ出る。

「そんな……麻痺薬が無効化された!? あと半日近くは動けないはずなのに」

予想を超えた力にサーシャの背中が冷たい汗でびっしょりになる。

「ようやく力を発動させたか、イセリアの女騎士ッ！」

ウォルガードも戦慄に表情を硬くさせながら、その一方で屈辱を晴らす好機の到来に喜



悦の笑みを浮かべた。

ますますいきり勃つ陰茎をしまい、魔剣アロンダイトの巨大な刃を構える。

その彼の声に、セリーヌが顔を上げた。猫の目を思わせる糸のように瞳孔が細い禍々しき瞳が、ギンツと巨剣士を睨めつけた。

「貴様を倒すツ！ うおおおあつ!!」

裂帛の気合いを込めて雄叫びをあげながら、ウォルガードが女騎士へと全力で斬りかかった。

寝台ごとまっぶたつに分断し、部屋の床に大穴を穿つであろう剛剣。避けられぬほど速く、受けられぬほど重い。

「コイ、我が剣……」

だがセリーヌがぼそりと呟いた刹那、その手の中に漆黒の刃持つ愛剣、クラウソラスが握られていた。

「そんな！ 取り上げて武器庫にしまったはずなのに!!」

サーシャがあげる驚愕の声を伴奏として、棒立ちのまま片手で無造作に剣を振り上げる。その太刀筋が目で追えぬほど速い。

ガギインツ！

大きさでも重さでも圧倒的に勝る黒剣士の巨剣を、やすやすと弾き飛ばした。

「ぐおおおつ、あああああつ!!」

この続きは製品版をご購入の上、
お楽しみください。

編集・発行

株式会社キルタイムコミュニケーション

〒104-0041 東京都中央区新富1-3-7ヨドコウビル

TEL03-3555-3431 (販売) / FAX03-3551-1208

※本作品の全部あるいは一部を無断で複製・転載・配信・送信したり、ホームページ上に転載することを禁止します。本作品の内容を無断で改変、改ざん等行うことも禁止します。また、有償・無償にかかわらず本作品を第三者に譲渡することはできません。

©KILL TIME COMMUNICATION Printed in Japan

<http://ktcom.jp/>

キルタイムコミュニケーション小説シリーズ あなたはどのタイプ?



ドキドキラブな
ハーレム系ライトノベル!

二次元
ドリーム文庫

サイズ:文庫

戦うヒロインが屈服されちゃう!
かなり過激なライトノベル!

二次元
ドリームノベルズ

サイズ:新書

※「二次元ドリームノベルズ」は18歳未満の方は購入できません

日常に密着したエロス、リアルな
舞台設定で送る官能小説レーベル!

リアルドリーム文庫

サイズ:文庫

フリーダム度120%!?
ジャンルにとらわれないドキドキ★ラブ!

あとみっく文庫

サイズ:文庫

詳しくはKTCの公式サイトにて! キルタイム

Click

電子書籍版も各ダウンロードサイトにて続々配信中!!



あなたのキモチイをお手伝い!

キルタイムのアダルトコミック誌!

業界唯一! エロラブ&エロコミック満載!!

うるし原智志
FCT
天海優乃
カクユウ

二次元
ドリームマガジン
ED DREAM MAGAZINE

今号の特集
異種

偶数月
17日発売

定価 1080 yen
vol.76
2014
06

編集長 和馬村政

二次元 ドリームマガジン ED DREAM MAGAZINE

魔法、催眠、性転換...不思議Hコミック誌!

04 2014
G-F8yen ans
魔法のエンチャント
恋の魔法サービス
魔法のエンチャント
魔法のエンチャント

COMIC
UNREAL
ファンタジー

絶好調! 不思議Hコミック誌増ページ特大号

奇数月
12日発売

Illustrated by
モクダン

COMIC UNREAL ファンタジー

KTCといえば闘うヒロインアンソ!

**メガミ
グライセス**
MEGAMI
CRISIS
Vol.17

Cover Illustration
和馬村政

Hな大冒険活劇、ついに完結!
雷の戦士ライディ
〜戦場の稲光〜

奇数月
下旬発売

ヒロインが
淫らに堕ちまくるアンソロジー!

メガミ グライセス MEGAMI CRISIS

詳しくはKTCの公式サイトにて!

キルタイム

検索



電子書籍版も各ダウンロードサイトにて続々配信中!!

※いずれも18歳未満の方は購入できません。